

四手井綱英先生を悼む

関西自然保護機構運営委員・琵琶湖博物館名誉芸員 布谷 知夫

2009年11月26日、関西自然保護機構の元会長、四手井綱英先生の訃報が飛び込んできました。97歳でした。先生は、戦前の秋田営林局での活動、戦後の林業試験場での雪害研究、そして1954年、京大の造林学教室を森林生態学教室に改めて、新しい森林学を開き、日本の森林や自然全体に積極的に発言をし、また京都大学退官後は日本モンキーセンター所長、京都府立大学学長などの要職を担当されて、一人の研究者という以上に、幅の広い活動をしてこられました。2009年9月には『四手井綱英が語る これからの日本の森林』（ナカニシヤ出版）が出版されたばかりで、あまりに突然のことでした。

先生が進めてこられたお仕事等については、すでに報道等で様々に紹介がされており、また本誌でも次号にご紹介されることになっていますので、関西自然保護機構に関わっての先生の足跡について少し書かせていただきます。

四手井先生は関西の自然保護運動の中で、中心的な存在でした。1960年代の後半に日本の市民運動としての自然保護運動が盛んになり始めた頃、その運動の当初の中心は東京と関西の2カ所でした。その関西の中心になって発言をしておられたのが四手井先生でした。学生の集まりや市民活動の場にも気軽に参加され、誰にも遠慮のない発言を繰り返しておられました。一方的に自然の保存だけを考えるのではなく、またその場の議論の流れにおもねず、明確に意見表明をされる姿は、当

初からであったと思います。組織的には、関西の研究者の運動体であった日本自然保護協会関西支部という、支部でありながら全く本部とは独自の活動を行う会の中心におられ、やがてこの支部は1978年に独自の自然保護活動体として関西自然保護機構へと改組し、先生にはその初代の会長を1995年までつとめていただき、その後は本会の名誉会員としてご指導をいただきました。

私が大学院に入学した時（1972年）、何かの用件があって教授室で先生とお話していたところ、来客があり、その人達は日本自然保護協会の方でした。1年少し前的大阪万博で協会のブースを作って活動をしていたことを紹介していただいたのが、私が自然保護運動のお手伝いをするようになったきっかけでした。

その翌年には先生は東京からの帰りの新幹線の中で心筋梗塞を起こされて、しばらくの入院をされました。これは東京の八王子大学セミナーハウスで行われた、自然観察会セミナーの帰りで、まだ始まったばかりで方法論が定まらない自然観察会運動の全国からのリーダーが夜を徹して議論をした場に参加されて、それまでの過労が溜まった結果だということでした。当時、徹夜までして学生とつきあわなくてもいいのに、と考えたことを思い出します。

関西自然保護機構の設立の準備に当たっては、基金を集めるために総合調査を受けて、その経費の一部を事務局費として保留し、また維持会員を

募るために、幾つかの会社へ出向いて新しい会の説明をするようなこともしていただきました。正式に会の発足が決まり、吉良先生、千地先生との3人で、関西自然保護機構という会の名前を決めた会談に、事務局の記録係として参加させていただいたことは、今も刺激的な思い出です。

先生はその後、関西自然保護機構での活動と、日本の森林政策などについての発言とともに、関西学園都市の自然環境保護の問題、新宮の浮島問題、現在は私が先生の会長代理をさせていただいている大阪府の和泉葛城山国指定天然記念物ブナ林の保護問題など、幅の広い自然保護問題に当たってこられました。年をとったので、主な役職は退いた、とおっしゃりながらも、大阪のブナ林の会議には会長として出席していただき、ご意見をいただいていた。

関西自然保護機構の会長を退かれた後も、会報（現会誌）に内部では「山科からの手紙」と呼ばれていた魅力的な論考を、毎号掲載していただいていたことは知られているとおりです。そしてこれらの論考の多くは、その後の先生の御著書の中でも掲載されています。また先生が第三回松下幸之助花の万博記念賞を受賞された際にはその賞金の一部を関西自然保護機構に寄付していただき、

その基金を元にして、現在、四手井綱英記念賞が定められ、会誌に発表された論文に対して贈られています。

先生の自然保護論は、その時代の常識や社会的な規制・流行からいつも一歩先を行った意見であり、ご意見を聞いて、ふと我に返って考え直してみる、というような所がありました。自然保護と言うよりも、日本の自然の姿と今後のあり方には、非常に強い意見を持っておられ、数多くある御著書の中では必ず「自然保護」という章を設けて、具体的な意見を述べておられました。本当に長い間に渡ってご指導をいただいたわけですが、この混沌として方向の見えなくなっている時代にこそ、改めて先生のご意見を伺いたいと思えてやまないところです。

最後に先生を端的に紹介する文書として、2001年に出版された『森の人 四手井綱英の九十年』（昭文社 森まゆみ）の帯の文書をあげておきます。

「里山の発見者にして森林生態学の創始者。今西錦司や桑原武夫と山に登り京大探検部をつくった。林野庁でも京大でも、森を守るために東奔西走。自然保護にも力をかけた豪放磊落な大学者の二十一世紀にたくす言葉」